

■ 目 次	ページ
令和5年度 特別講演会 (『都心の魅力づくり』新たなステージへ～みんなで育む、ひろしま都心の未来～)	2
第1回都市計画研究会 (3D 都市モデルの活用と課題)	4
第2回都市計画研究会 (アーバンサイエンスとまちづくり)	5
令和5年度 研究交流会 (地域と価値を共創する大学づくり)	6
2023年度 第5回都市計画サロン (都市のコバコ「魅力ある都市空間づくり～行政プランナー(技術者)に伝えたいこと～」)	7
2023年度 第6回都市計画サロン (スペイン・バルセロナのまちづくりと建築の現在)	9
2023年度 支部地域活動助成事業 (徳山駅周辺でのエリアマネジメントの展開4)	10
GIS Day in 中国 2023	12
今後の活動計画	13
編集後記	13



■令和5年度 特別講演会■

『都心の魅力づくり』新たなステージへ～みんなで育む、ひろしま都心の未来～

日時：2024年1月21日(日) 14:00～16:15

場所：広島 YMCA 国際文化ホール

主催：日本都市計画学会 中国四国支部

共催：日本建築学会 中国支部

後援：広島県・広島市・中国新聞社・広島県建築士会
広島支部

参加者：102名

■趣旨説明（渡邊一成氏・福山市立大学教授）

広島市では「楕円型の都心づくり」を目標に掲げ、都心部の再生を進めている。既に広島駅北口等の再開発や旧広島市民球場跡地の整備が進むとともに、広島駅南口地区やサッカースタジアム・広島城三の丸地区の整備、平和大通りの一部公園化など数多くのプロジェクトが進められている。また、民間主導によるまち育て（エリアマネジメント）の活動が進むなど、ハード・ソフトの両面からの取り組みが進められている。



渡邊一成 氏

2024年2月のエディオンピースウィング広島の開業を皮切りに、多くのプロジェクトが実現の段階に入り、市民・県民の期待が高まっている。また、コロナ禍の回復による国内外からの来訪者の急増により広島への注目が高まっている。これらの機運を捉えて都心の魅力づくりにつなげていくためには、行政のみならず、そこに住み働き、活動する人々や事業者等が一体となって、魅力的な都心を育てていくことが求められる。

そこで、この機会に多くのプロジェクトにかかわってこられたキーパーソン（仕掛け人）をお招きし、その思いをお聞きするとともに、これらのハード整備を生かした新たな広島市都心の魅力づくりの可能性・方向性を考えたい。

■基調講演①「NTT 都市開発が描く、広島都心部のまちづくり」(中村高士氏・NTT 都市開発(株) 中国支店長/NTT アーバンソリューションズ 広島プロジェクト推進室長)

NTT 都市開発では、不動産開発の他、エリアマネジメント等各協議会への参画、NTT グループと連携した DX によるまちづくりを推進することから、基町クレドを中心とした範囲（中央公園～基町、紙屋町、八丁堀～平和大通り）をまちづくり戦略エリアと設定している。

基町クレドを中心としたエリアにはたくさんの歴史と文化が詰まっており、「歴史・文化の継承と発展」を

テーマに、より一層の「賑わい」「回遊性」「良好な環境」の実現により『世界の“憧れと共感”の象徴』となる街づくりを進めている。広島は、「一度は訪れたい」2つの世界遺産（原爆ドーム、厳島神社）がある世界有数の観光都市である一方、「リピート率の低さ」「通過都市」が課題となっており、当社は新たなスポットを創造し、「広島観光は1日2日では回れない」、そして「来年も」、さらには「何度も」訪れたい場所を目指している。

当社が関わっている具体的な事例は以下の通りである。

- ① 旧広島市民球場跡地整備事業（ひろしまゲートパーク）
- ② HIROSHIMA スタジアムパーク
- ③ 中央公園広場エリア等整備・管理運営事業
- ④ 広島城三の丸整備等事業
- ⑤ 広島県庁舎敷地有効活用事業
- ⑥ 基町クレド再生プロジェクト
- ⑦ 相生通りトランジットパーク構想
- ⑧ 八丁堀 3・7 地区再開発

これらの事例をつなぐ「公園とストリートを核にしたウォークアブルな街」となるよう、賑わいと回遊性にあふれた、世界に誇れる広島物語を紡いでいきたいと考えている。

■基調講演②「官民連携による広島都心のまちづくり推進に向けた取り組みについて」(末松辰義氏・広島都心会議事務局長/広島電鉄(株) 執行役員 地域共創本部長)

まず「なぜ“広島都心会議”が必要だったのか」という点について解説する。広島都心部では再開発の計画・実施が相次いでおり、まちが変わりつつある今、手遅れにならないよう 2016 年の広島経済同友会の提言をきっかけに、広島都心活性化の動きや“官民連携のまちづくり組織”の設立の機運が高まった。そこで、2021年にまちづくり団体や地権者と行政の中間に位置するプラットフォームとして、双方と連携し一体となってまちづくりを推進することを目的に「広島都心会議」が設立された。

会長は広島電鉄社長、副会長はひろぎん HD 社長と広



中村高士 氏



末松辰義 氏

島ガス会長、顧問として広島県知事、広島市長、広島商工会議所会頭をおき、正会員 52 社、賛助会員 24 社、特別会員 2 社、オブザーバー 2 自治体の県内外の多種多様な業種が参画する組織体制となっている。

広島都心会議では、広島県と広島市が策定した「ひろしま都心活性化プラン」を踏まえ、広島都心の持つポテンシャルを活かし、民間視点での具体的な「広島之都心部をこうしたい」といった目指すべき姿と、その実現に繋がる「具体的な施策」を作成するとともに、それを多くの人と共有することが必要と考え、「広島都心会議ミライビジョン 2030」を策定・公表した。

目指すべき姿としては、「広島之都心は、2030 年までに環瀬戸内文化経済圏の中心都市＝首都となる」ことを宣言し、「海と山に囲まれた（自然と都市機能が近く／都市と自然が融合する）瀬戸内エリアがより存在感を出していくために、広島之都心がエリアの中心として、周辺の経済、文化、観光等における発展を牽引するべく、イノベーション、ローカリズム、くらしの中心として、ヒト・モノ・カネが集積する都心にふさわしい圧倒的な高次都市機能・役割をもつ存在を目指します」とした。

広島都心会議の活動としては、広島都心部のまちづくりに対する機運を高め、活性化させる活動として「官民よろず相談所」の設置、若者がまちについて考える場を開催している。立場を超えた多様な方が広島之都心について考え、共有する場として、「支店企業勉強会」、「都市 to デザイン」を開催している。また、エリアマネジメント団体間の連携促進・調整・支援として、「エリマネ支援制度」の構築や「エリマネミーティング」を開催している。今後もミライビジョン推進に向け、各企業の事業計画や行政施策へ組み込むための働きかけや、まちづくり団体等が同じ方向性に向かって、都心活性化に向けたアクションが実行できるよう支援を続けていきたいと考えている。

■パネルトーク パネリスト：中村高士氏、末松辰義氏
コーディネーター：木原一郎氏（建築家／広島修道大学准教授）

まずコーディネーターの木原氏から自身関わっている「紙屋町・八丁堀エリアマネジメント実践勉強会」から派生した「カミハチキテル」プロジェクトの紹介があり、相生通りのトランジットパーク構想の実現に向けた社会実験の取り組みについて説明がなされた。



木原一郎 氏

続いてのパネルトークでは、広島都心部のまちづくりについて、①空間づくり、②暮らしづくり、③人づくり

の 3 つのテーマより、トークが展開された。

①空間づくりに関しては、公共の敷地、民間の敷地を問わず、民間が取り組む空間づくりにおいて、広島らしさ、使う人を通じたその「場」らしさについての重要性が指摘された。

②暮らしづくりに関しては、広島都心部での様々な「暮らし」を考える上で、若者・家族連れ・高齢者・ビジネスマンなどの様々な対象者を想定した際、都市で暮らす選択肢を増やす、そしてそれを暮らしの質や豊かさを高めていくことにつなげることの重要性が指摘された。

最後に、③人づくりに関しては、広島固有の文化を醸成し、振興し、育むという「人づくり」の展開において、現在進めている公園整備が、広島城から平和記念公園まで「つなぐ」ことから、広島の真の歴史をつなぐと言う意味で、戦後の復興力のみでなく、江戸から明治、戦前戦後、そして未来へと歴史を語れる人を育てていくことが、これからの広島には重要であると指摘され、盛会のうちに終了した。



パネルトークの様子

(文責：伊藤 雅)

■第 1 回都市計画研究会■

3D 都市モデルの活用と課題

日時：2024 年 12 月 16 日(土) 16:00~18:00

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ
(オンラインとの併用)

主催：(公社) 日本都市計画学会 中国四国支部

参加者：34 名



■講演

「広島駅周辺をフィールドとしたエリアマネジメントのためのユースケース実証のご紹介」の題で、復建調査設計株式会社の天野佑介氏、アジア航測株式会社の守屋三登志氏より講演いただいた。紹介いただいた取組は復建調査設計とアジア航測が共同で進めている事業であり、昨今の DX、3D 都市モデル・BIM/CIM 等のデジタルツインにかかる機運の高まりを受け、個々の研究開発テーマを進めるだけでなく、その基盤として技術やサービスの実証を行うことができるプラットフォーム=デジタルツインを構築することで、今後の研究開発・商材開発を促進することを目的としたものである。

R3 年度より 3D 都市モデルの整備を開始し、R4 年度より国土交通省のプロジェクト PLATEAU へ参画した。3D 都市モデルビューワとダッシュボードを組み合わせた地域情報プラットフォームを構築することで以下の課題解決の方向性について試行した。

課題解決の方向性 (3 つの柱)

(1) エリアマネジメント活動状況や効果の可視化、地域情報の配信

エリアマネジメント活動の効果、地域情報等の可視化による活動と効果の関係の地域内での共有

(2) エリアマネジメントエリアの地域防災力の向上 駅周辺における帰宅困難者の安全・安心な避難誘導に向けた避難計画の検討支援

(3) エリアマネジメントエリアの賑わい創出

イベント開催による効果検証とその結果を踏まえた、今後の企画立案の検討支援

広島駅周辺の 3D 都市モデルの整備及び、地域情報プラットフォームの構築はアジア航測が主体となり実施している。3D 都市モデルの整備方法として、建物や道路の外形を都市計画基本図から拾い、航空測量の結果から

高さ情報を与えている。属性情報は都市計画基礎調査の情報を与えている。3D 都市モデルの整備には行政の持つ情報を最大限活用することがポイントとのことだ。

広島駅周辺では、LOD2 を基本としてデータ整備を行っているが、一時滞在施設(シェラトングランドホテル、ホテルグランヴィア広島、広テレビル)やペDESTリアンデッキでは LOD3、南北自由通路では LOD4 のモデル化が行われている。LOD3 以上のモデル作成は航空測量のみでは困難なため、歩行型レーザースキャナーや建築図面等を用いてモデル化を行っている。詳細なモデルは避難経路や浸水想定イメージを可視化するのに効果的である。

3D ビューワとダッシュボード(人口や世帯数、事業所数の推移等の統計情報)を組み合わせたプラットフォームを構築することにより、地域情報や災害情報、エリアマネジメントの活動記録等をわかりやすく可視化することが可能となっている。

構築した地域情報プラットフォームはエリマネ会員や一般の方(エリアマネジメント団体が主催するマルシェの来場者)向けに試行利用してもらい、多くの人が情報配信をわかりやすいと評価している。

今後の展望としては以下のようなことを掲げている。

- ・地域情報プラットフォームの効率的な管理・運用
- ・マネタイズを含めた運営スキームの構築
- ・スマートフォン画面等の UI/UX 等については更なる改修
- ・エリアマネジメント団体に留まらない近隣住民の利用を促進するプラットフォームの構築

■質疑応答・パネルディスカッション

質疑応答では、プラットフォーム構築に対するエリマネ会員の評価についての質問には、地域情報と自分たちの活動と重ね合わせられることによって、どこでどのような活動を行っていくべきかより分かるようになってきた。情報が可視化されることにより、新しい発想のきっかけとなっているという回答がなされた。

また、近年民有地の公共的利用(有効空地・公開空地等)が進んでいる背景から、民有地内の詳細なモデル化についての可能性について議論がなされた。

パネルディスカッションでは、考えられる 3D 都市モデルの活用方法として、行政による市民との合意形成ツールとしての活用や、都市環境に関するシミュレーション等の研究利用、不動産分野への活用等が提案された。

国土交通省からは PLATEAU ビジョン 2023 が発表され、3D 都市モデルの整備・活用・オープン化が自立的に発展していく「エコシステム」の構築を目指している。3D 都市モデルの整備が一層進む中で、3D の価値を見極めた活用方法を見出していくことが重要だと感じた。

(文責：田中健太)

■第 2 回都市計画研究会■

令和 5 年度テーマ：デジタル技術と都市計画

第 2 回テーマ：アーバンサイエンスとまちづくり

日時：2024 年 1 月 20 日(土) 16:00~17:45

場所：広島大学東千田未来創生センター講義室 204

(オンラインとの併用)

主催：(公社) 日本都市計画学会 中国四国支部

参加者：48 名 (会場+オンライン)

■都市計画研究会について

第 2 回都市計画研究会では、「アーバンサイエンスとまちづくり」というテーマの下、AI やビッグデータを活用した建築・まちづくりの分野に従事する吉村有司先生(東京大学先端科学技術研究センター・特任准教授)を講師に迎え、講演が行われた。

■イントロダクション

吉村氏は、2001 年に渡西してバルセロナ市の公的機関の職員として同地の都市計画に携わった後、2017 年からは米国・MIT の研究員を務め、2019 年の新型コロナ禍直前に日本へ帰国し、現在は東京大学に所属している。

冒頭、自身の研究領域の紹介があり、家庭ゴミを IoT 機器でトラッキングした「Trash Track」、都市の下水を調査した「Underworlds」、ジャウマ・バルセロ氏(交通工学の世界的権威)が開発した交通シミュレーターを用いた「交通量や大気汚染の予測」の 3 つのプロジェクトを引用しながら説明が行われた。

■建築・都市における AI とビッグデータの可能性

講演では、「テクノロジーを用いた都市分析、まちづくりへの応用事例」として 5 つの事例が示された。

1 つ目は、都市の緑視率のマッピング手法の開発である。「都市のどこに、どれだけの緑があるか」を調査する場合、従来は、調査員がマニュアルで収集する手法や航空写真を解析する手法が多く採用されてきたが、調査方法や分析結果には問題点も指摘されている。そこで吉村氏は、歩行者目線から見た緑の分布を都市全域で明らかにするため、街路レベルから見た風景を Google Street View から収集し、ディープラーニングにより樹木の情報を自動的に抜き出すモデルを構築。これにより、歩行者目線から見た緑の認知に近い、都市全域の緑の分布のマッピングを可能とした。

2 つ目は、日陰ルート探索アプリ「HIKAGE FINDER」の実装である。「事例 1 のような開発技術をどのように使えば市民生活の質が上がるのか」という関心から、事例 1 の技術に太陽高度や既存の最短経路アルゴリズムなどを掛け合わせ、日陰の多い経路を探るシステムを開発。現在、渋谷区を対象とした日陰マップを β バージョンとしてリリースしており、渋谷区以外の街でも構築できるよう、システムコードを GitHub 上で公開している。

3 つ目は、都市の多様性をビッグデータで定量分析す

る試みである。「都市多様性」は、ジェイン・ジェイコブズ氏が「アメリカ大都市の死と生」の中で重要性を主張した概念だが、その定義や効果については長らく議論が続いてきた。そこで吉村氏は、生物学で提案されている「種の多様性指数」を都市に適応し、都市多様性を「街路レベルにおける小売店の数と種類の豊富さ」と定義した上で、クレジットカード決済情報と比較することで、都市多様性と小売店・飲食店の売り上げとの相関関係をスペイン 50 都市で検証した。その結果、都市多様性が高いエリアにおいては小売店・飲食店の売り上げが向上するという正の相関関係が見いだされた。

4 つ目は、近年のまちづくりで重視されている「歩いて楽しいまちづくり」において世界をリードするバルセロナ市のスーパーブロックプロジェクトである。市内全街路のうち 60% 以上の街路を歩行者空間化するというプロジェクトで、公共空間の増加、大気汚染の改善、騒音の減少といった劇的なベネフィットが見込まれている。吉村氏は、この計画のパイロット事業であるグラシア地区の歩行者空間化を担当。プロジェクト前には廃れていた同地区は現在、市内で最も住みたいエリア、オシャレなエリアとして認知されるようになり、スーパーブロックプロジェクトに対する地域の理解にも繋がっている。

5 つ目は、歩行者空間化を科学的に進める手法である。近年、世界各地の都市で歩行者空間化が進んでいる一方で、その効果や影響を定量的に検証している事例は殆どなかった。そこで吉村氏は、オープンストリートマップから街路の用途変更情報を抽出する技術を開発した上で、周辺に立地する小売店・飲食店の売り上げ(クレジットカード決済)情報と比較することで、歩行者空間化とその経済的な影響をスペインの全ての都市、全ての街路で検証した。その結果、歩行者空間化が周辺に立地する小売店・飲食店の売り上げにポジティブな影響を与えることが明らかになった。

■質疑応答・意見交換

講演後のディスカッションでは、日本型の都市多様性の捉え方や日本文化にあった合意形成のとり方、人材育成のあり方等、日本と欧米の違いを踏まえた「日本における AI・ビッグデータを活用したまちづくりの可能性」について盛んな議論が行われたほか、吉村氏より都市多様性に関連する研究を行う学生にエールが送られた。



当日の様子(左：講演会場にて、右：打ち上げにて)

(文責：金井れもん)

■令和 5 年度 研究交流会■

「地域と価値を共創する大学づくり」

日時：2023 年 12 月 23 日(土) 13:30~15:30

場所：etto 宮島交流館

主催：広島工業大学 宮島・土曜講座

共催：日本都市計画学会 中国四国支部 研究交流委員会

参加者：20 名

■開催趣旨

研究交流員会では、中国四国支部および近隣支部の各地域相互の研究交流の場を設ける活動を行っている。このたびは、まちづくりと地域貢献をメインテーマとして宮島にて対面形式の講座を 14 年間に渡って開催している広島工業大学「宮島・土曜講座」の場をお借りし、本学会中国四国支部との共催として、令和 5 年度研究交流会を実施した。

講師として、和歌山大学紀伊半島価値共創主幹の西川一弘教授をお招きし、「地域と価値を共創する大学づくり」と題して大学の地域貢献事例についてご講演いただいた。宮島での現地参加での開催形態とし、本年 10 月に開始された宮島訪問税の体験も兼ねた本学会員の研究交流の場を目的として開催したものである。

■講演概要

はじめに 2020 年 4 月に和歌山大学が設置した「紀伊半島価値共創主幹 Kii-Plus」についての紹介があった。従来の地域イノベーション機構と地域活性化総合センターの体制を一新したもので、学長を基幹長とし、紀伊半島の持つ価値を進化させていくことが、和歌山大学の基幹的ミッションであるとの考えの下設置されている。本基幹は、2 センター、1 研究所、1 室、2 サテライトで、紀伊半島が抱える課題の解決と地域の事業発展について、研究成果の提供にとどまらず、自治体・企業・市民団体等との共創を通じた教育研究の展開により、地域社会の発展に寄与することを目的としている。

主な成果としては、①市町村長と学長とのトップ対話、②自治体・各種機関との中身のある協定締結、③地域か

らの相談窓口機能の一元化、④価値共創研究員による人材交流と共創プロジェクトの推進、⑤社会実装教育研究プロジェクトの展開、を挙げることができる。また、学生の活躍の場を地域に展開する取り組みも行っており、「Kii Plus 地域学生プロジェクト」では、地域共創を深めるため、地域連携や社会貢献の取り組みの費用の支援を行っている。

これらを実際に動かしているのが、地域と大学をつなぐコーディネーターであり、大学の歴史、大学の使命、雇用形態、予算、大学の属性、大学の規模、大学の立地、大学の理解などの諸条件により多様なコーディネーターの形がある。西川氏の私論として、これからの大学地域連携は「大学地域“共育”＝“跳ね返り論”」であることを踏まえて大学と地域の相互発展を目指すことが重要であると指摘し、今後ますます異をつなぎ、変化をプロデュースし、新しい価値を共創するコーディネーターの役割が重要となることを強調された。2010 年の和歌山大学南紀熊野サテライトで主催した「地域型サテライトサミット in 南紀熊野」をきっかけに地域連携に関わる教職員・コーディネーターの人材育成のためのセミナーや研究紀要「大学地域連携研究」の発行による研究発信を継続しており、地域と価値を共創する大学づくりと地方国立大学モデルの確立を目指していることを示された。

■ディスカッション

和歌山大学の現在の組織は令和 5 年度の執行部交代により体制が大きく変わりつつあり、トップの理解が重要なカギになる。地方では人口減少と地域の衰退が加速している中で、大学と地域が危機感を共有していくことの重要性、地域連携に各種学会がいかに関わるべきか、などの議論がなされた。本会の開催地である宮島においても、様々な研究分野に関わる大学同士の連携を模索しているが、大学による温度差があり実現には至っていない現状についても共有した。講演後の懇親会では今回の参加者は何かしらの和歌山とのつながりが発見され、地域連携の仲間づくりのきっかけとして有意義な交流会となった。

(文責：伊藤 雅)



■2023 年度 第 5 回都市計画サロン■

第 2 回 都市のコパコ「魅力ある都市空間づくり～行政プランナー（技術者）に伝えたいこと～」

日時：2023 年 11 月 17 日（木） 19:00～20:45

場所：広島大学東千田キャンパス 総合校舎 L 棟 5F

「SENDA LAB」、オンライン：Zoom

主催：日本都市計画学会中国四国支部

参加者：23 名（オンライン共）

塚本俊明氏について

1952 年東広島市生まれ。1971 年広島大学工学部建築学科入学。1976 年株式会社都市環境研究所入社後、賀茂学園都市計画を始めとする様々な都市計画業務に携わる。その後、広島大学産学・地域連携センター教授、広島工業大学工学部特任教授を経て現在は広島大学名誉教授。



1. 個人的な経験から

■賀茂学園都市マスタープラン

広島大学の統合移転を契機とする「学園都市」の開発計画。広島大学在学中にアルバイトとして参加し、先端的（当時は）な計画技術に触れた。計画書の印刷のための図版づくりや図面作成（色塗りなど）を通じてプランニングの考え方、方法論を学んだ。計画内容を「空間」として表現することの必要性、重要性に触れる。スケッチはその後の業務の中で非常に重要な技術となった。

■千里ニュータウン

アルバイト先の見学旅行に参加し、近隣住区論に基づくコミュニティ単位の計画的配置など、当時の先進的な計画事例に触れた。

■高蔵寺ニュータウン

住区構成等に新しい考え方が導入された。

■津端修一先生

高蔵寺ニュータウンの計画者。昭和 50 年代前半：広島大学教授としてキャンパス計画を担当／東広島市の総合計画に関与。高蔵寺ニュータウン内にて自給自足の半農生活のかたわら、フリー評論家として活動。人生フルーツという映画にご夫妻で出られています。

■筑波研究学園都市

都市環境研究所の創立メンバーが筑波研究学園都市のマスタープランチームに関わっていた関係で、プランニングの考え方や実際の開発状況、都市空間に触れる機会に恵まれた。「つくば」の開発は、日本住宅公団（当時）の技術者が中心となって計画された。当時の関係者の思い入れは強い。

センター地区の骨格構成、道路・歩行者ネットワーク、機能配置の考え方を教わる。実際に様々な関係者が関わって実現された。

2. 仕事としての関わり

都市計画の仕事の中で、新しい計画技術に触れ、実際にその空間を体験した。

■水戸市六番池住宅

準接地型集合住宅の先駆けとなった公営住宅で新しい住環境（住宅単体ではなく集合住宅の外部空間を含め）の創出を目指した意欲的な取り組みだった。

■東広島ニュータウン

建築協定の作成に携わった東広島ニュータウン。地域振興整備公団の地方都市開発事業として開発され、当時の先進的な計画手法が随所に投入された。

※ニュータウンで蓄積された計画技術は、現在でも都市設計に当たって極めて参考になる。

公団の開発する大規模住宅地として、質を高める様々な工夫が盛り込まれた。建築協定により豊かな環境を守っている。

■広島圏都市計画区域市街地整備基本計画（広島県）

仕事の拠点を広島に移し、広島を中心に様々なプロジェクトに関わった。最初の業務が「広島圏都市計画区域市街地整備基本計画」（広島県）。五日市町の担当者が松田さん。

広島圏都市計画区域（広島市を除く）の都市計画事業に関する長期方針及び事業プログラムの作成を目的として実施。（府中・五日市・廿日市・大野・大竹を担当）

事業の優先順位を判断する「地区診断」から都市の形成にかかる方針策定、事業費算定と財政推計に基づく事業プログラムなど広範囲な知識を学んだ。

■広島駅周辺地区都市総合再開発促進計画（広島市）

同時期に取り組んだ業務が「広島駅周辺地区都市総合再開発促進計画」（広島市）。同地区（特に新幹線口地区）の計画は状況の変化を受けて数度にわたり関わることになった。

■広島市の景観整備

昭和 56（1981）年 3 月「広島市の都市美づくり～広島市都市美計画」市民各界の代表者など 45 名の委員で構成する計画策定委員会と、関係部局の職員 73 名からなる計画策定主任グループが 2 年の歳月をかけてまとめたものである。「広島市の都市美づくりは、このように場所に応じた景観イメージを強引に描き、市自らが実践して見せ、また関係機関に理解と協力を求め、そして民間のビル建設に際して都市美の観点に立った協議、誘導を一つ一つ重ねていくことによって、徐々にしかし着実に進んできている。」

「都市美計画に都市美スケッチを掲げ、また、街路・公園緑地の景観整備や市街地緑化の拠点としての公共施設緑化を積極的に展開する一方で、個々の民間ビルへの景観指導も今では 700 余件に達するまでになった。」

「広島市の都市美づくり」岩田悦次広島市企画調整局企画担当、出典：「土木技術」40 巻 4 号 1985 年 4 月

広島市に関わる業務の中で大きなテーマの一つが都市景観形成に係る計画。当時、広島市では「都市美計画」が作成され、行政職員の熱意で先進的な「都市美」づくりに取り組まれていた。（「都市美スケッチ」を描き様々

な努力で実現化)

■広島市「水の都整備構想」

「都市美スケッチ」に描かれた水辺空間整備を実現するには、河川空間の利用を縛っている様々な規制をクリアすることが必要。このため、広島市（の担当職員）が国・県を巻き込んで水辺の利用・活用に関する構想を策定することになり、計画策定に関わった。水辺空間の利活用に関する提案をスケッチとして表現。

■水辺のオープンカフェ

1995 年頃から「カフェテラスクラブ」が自主的な活動として展開。建築士会（まちづくり委員会）など各種のグループが参加。2004 年河川利用の特例措置により京橋川両岸で「京橋川オープンカフェ」を開始（実施主体は「水の都ひろしま推進協議会」現在は元安橋下流でも実施、水辺の利用についての意識を市民（利用者）サイドから盛り上げるため、広島市の職員が中心となってボランティアな活動を展開。河川沿いの事業者や町内会などの理解を得て、オープンカフェの実現につながった。（建築士会のメンバーとしてこの活動に参加した）

■可部のまちづくりワークショップ

広島市の職員の提案により、可部地区の住民が地域を知り、まちづくりを考えるきっかけとしてワークショップを実施した。広島における「参加型まちづくり」の先駆けとなったプロジェクト。（建築士会のメンバーとして参加した）

1996 年、広島市安佐北区の魅力づくり事業（職員から募集した）として採択され、建築士会（まちづくり委員会）が支援してまちづくりワークショップを実施（広島におけるまちづくりワークショップの先駆け）。

この事業を契機として誕生した市民グループ「可部からずの会」は、その後の可部地区のまちづくりを中心になって牽引している。

■コイン通りのまちづくり

広島市佐伯区五日市の中心商店街の商店街振興組合の支援として「まちづくり協定」の発効のための作業に参加した。区役所の職員のアイデアにより、協定案の地元への説明を寸劇で実施。その結果、地元住民の賛同を得て、コイン通りをとりまく地域づくりを考える「まちづくり委員会」の活動に発展した。ユニークな活動の事例。まちづくり委員会の活動は、度々マスコミで取り上げられたほか、まちづくりに関する多くの賞を受賞した。現在は「金持神に会える街」をコンセプトに活動を展開。

■まちづくりワークショップ

住民参加のまちづくりににおける「参加」の手法としてワークショップが多用されているが、位置づけや目的、方法論について共有されないまま、手段が目的化しているケースが多いのではないかと。実施する行政の立場・覚悟が問われる。

■広島市区別計画策定調査

まちづくり懇談会資料作成、1997-98 年度：業務とし

て関わる。広島市区別まちづくりワークショップ 2007-8 年度（都市計画学会中国四国支部受託事業）。学会の立場であったが担当を辞退した。

■最近、思うこと…

これまでの関わりの中で、当初はニュータウン計画など都市空間を扱うことが多かったが、後半は「まちづくり」に関わる内容が増えていた。大学の立場になり、別の視点から見てみると、気になることがある…。

○行政プランナー（技術者）の「顔」が見えない

かつてのように広島県や広島市の担当者と、都市計画、まちづくりや都市空間について議論する機会が減った。行政プランナー（技術者）の「思い」が伝わってこない。これは民間プランナーについても言えると思える。

○「ハード」なまちづくりの技術が創造・継承されていない？

ニュータウンにおける「近隣住区」の考え方など、都市計画技術者として知っておくべき知識や技術が備わっていないのではないか？コンサルタントを「管理」する役割と勘違いしていないか？

○「プランニング」のノウハウが構築・継承されていない？

同様に、「計画」をつくることの意味や役割、それを住民や様々なステークホルダーと共有し具体化していくノウハウが蓄積されていないのではないかと。計画策定の主体としての当事者意識が薄い？都市空間の形成に携わる土地地区画整理事業の技術者も同様のことが言えないか？

■技術者（プランナー）に期待すること

○まちづくりのプロとしての技術・ノウハウを身につける

- ・まちづくりのプロとして、目指すべき「まち」の将来像を描く（イメージすること）。様々な事例（空間、環境）を体験し、身体感覚を身につけることが必要。
- ・まちづくり（事業）の目標や大きな流れを理解すること。

○住民の活動をリードする

- ・望ましいまちの将来像や、実現のための制度・事業の仕組みなどの情報や意識を共有し、正確な判断ができるようにすること。

○求められる「コミュニケーション能力」

- ・住民の思い・疑問を汲み取り、情報を正しく伝えるためのコミュニケーションが最も重要。必要なのは、まちづくりに対する「思い」。

皆さんの「まちづくり」への取り組みに期待しています。

【総評】

塚本さんの半生と都市計画をたどる話題でなかなか味わい深い講演でした。都市計画プランナーWEB 参加も含め多くの皆様にご参加いただきありがとうございました。



（文責：福馬晶子）

■2023 年度 第 6 回都市計画サロン■

スペイン・バルセロナのまちづくりと建築の現在

日時：2023 年 10 月 21 日 (土) 15:00~17:00

場所：広島大学東千田キャンパス (広島市中区)

主催：日本都市計画学会中国四国支部

参加者：約 15 名

本年度の支部研究発表会の招待論文として発表のあった「バルセロナの都市とカタルーニャの建築」で発表会当日では語り切れなかったことについてお聞きするために谷川大輔氏をお招きし、都市計画サロンを開催した内容を報告する。

■概要

スペインのバルセロナは、ヨーロッパのイベリア半島の北東部、地中海に面したカタルーニャ州の州都で、ガウディのサグラダ・ファミリアに象徴されるような観光都市であるとともに、都市計画やまちづくりにおいても、現在、注目されている取り組みが多い都市である。当サロンでは、バルセロナの都市について歴史から紐解き、現在、どのような状況であるかを解説するものである。

講師：谷川氏は、2022 年 3 月から 2023 年 4 月までカタルーニャ工科大学に在籍されており、その間の知見を発表するものである。

■講演

昨年度の 1 年間、在外研究の機会が与えられ、スペインのカタルーニャ地方の州都バルセロナへ行くことができた。4 月の支部研究発表会では、語り切れなかったのでこの場でお話したい。

ちょうどウクライナで戦争がはじまって北周りで行くことができず、南回りドバイ経由でスペインへ。日本との時差は 8 時間。カタルーニャはイベリア半島北部の州であり、地中海に面している。スペイン語を勉強しても通じない。通じないわけではないが独自の文化を守っている場所であり、バルセロナとマドリードはあまり関係がよくない。

「地球の歩き方」というわくわくできる本があり、これを手掛かりにバルセロナの街を見てまわった。バルセロナは、海に面する旧市街、そのまわりに新市街、周囲は山に囲まれていて、坂の町でもあり、山の方、北の方が地価も高くそこは高級住宅街になっている。

観光で 3 泊 4 日でバルセロナに来るとガウディを中心に巡ることになる。まずはサグラダ・ファミリア。完成予定だったが新型コロナ感染症の影響で完成が遅れている。その他、グエル公園、これは住宅地を開発しようとして作った公園。集合住宅であるカサミラ。グエル邸はガウディの最初期の作品で、グエル氏はガウディのパト



サグラダ・ファミリア

ロンであった。そして、最高傑作と言われるコロニア・グエル教会、これはサグラダ・ファミリアより前の作品である。バルセロナは、観光都市であり、多くの人を訪れる、いわゆるオーバーツーリズム状態。

市の南西に位置するモンジュイックの丘は万国博覧会が開催されたところであり、オリンピックも開催された。

バルセロナはローマ勢力により都市が築かれたところからスタートして、マドリード支配期の城塞都市、そしてグリッド状に整備された新市街地へと成長してきた。成長の力は第 2 のマンチェスターと呼ばれる多くの繊維産業・工場による発展で、当時かなり人口密度が高く衛生状態もよくなかったため、同時に都市計画も行われている。

現在のバルセロナは、地下鉄がたくさん走っていて、バス路線も充実し路面電車もある。都心に車が多く、工場の排気で空気が汚かったが、市民のための政策が若い女性の市長によって進められている。街を歩くと町中で工事をして、緑あふれる道に生まれ変わっている。いくつかのブロックを大きくして車の入らない空間を作る。また、スマート化・IT化も進められていて街にセンサーがいっぱいあって環境調査もしている。ゴミ箱がシステム化されていて、ゴミが溜まると収集車が来るようになっていて、貸自転車もデータで管理されている。

今、バルセロナは IT 産業が集積されつつある。工場跡地で長い間放置されていたところをオフィスビルにしている。バルセロナの取り組みを日本に置き換えて、ここ広島でもその考え方は役立つものと考えている。

■質問・意見交換

160 万人の都市としては地下鉄が充実している。観光都市であることが影響しているだろうか、との問いに、観光客が押し寄せることの影響に加えて、国際的な IT 見本市が行われるほど IT 産業がここで根を下ろしていることも影響しているとの考え方が示された。(他質問あり)



IT化されたゴミ箱



工事後に整備された緑あふれる街路

(文責：北本拓也)

■2023 年度 支部地域活動助成事業■

徳山駅周辺でのエリアマネジメントの展開 4

日時：令和 5 年 11 月 18 日(土) 13:00~15:00

場所：周南市役所 1 階多目的室（周南市岐山通 1-1）

主催：徳山高専テクノ・アカデミア、周南市、
日本都市計画学会中国四国支部

参加者：23 名

プログラム：

1. 講演会：「まちのにぎわいを「民」のチカラでつむぐ」
2. 意見交換：「民」のチカラとは、何か？取り組みの成果と今後の展望（司会：徳山高専 目山直樹）

1-1. 「徳山駅周辺における官民連携事業」

講師：原田修司氏

（周南市都市整備部都市政策課課長補佐）

事業の経緯とこれまでの進捗状況、今後の展望について、ご講演いただいた。5 年前の時点で、中心市街地のにぎわいを創出するには、どのような調査をすべきか、また、どの範囲で行えばよいかを手探りで始めたところから、中心市街地に行政側の委託事業が 22 もあることがわかり、これを一元化し効率化できないかという視点に変わっていった。

次の段階として、国土交通省の支援を受けながら、これらの事業を統合する官民連携事業（以下、PPP とする）を企画・調整・事業化する検討へと進んだ。

2020 年から、数回に及ぶサウンディングにより、事業に参画する主体者を探すとともに、2022 年には、プロポーザルによる事業提案にまでこぎつけた。2023 年度から、受託者による取り組みが行われている。

2023 年度から 5 年間、「周南ツナガルコンソーシアム」による事業運営を継続する予定である。5 年おきに受託者の選定を行い、その都度、事業の見直しを行う予定である。



講演時の様子

1-2. 徳山駅周辺管理運営事業、指定管理者「周南ツナガルコンソーシアム」の取り組み

講師：組谷明豊氏

（周南ツナガルコンソーシアム 統括管理責任者）

この事業者グループは、徳山駅前図書館の指定管理者でもあるカルチャーコンビニエンスクラブ（以下、CCC と称す）と、地元の造園業と、駐車場管理会社がタッグを組んで、徳山駅周辺の 19 施設の業務委託を受けるものである。

2023 年 4 月から 10 月までの数字と、2022 年度の数字を比較してみると、施設許可件数は、駅前広場で 85 件（前年 25 件）と 294%、公園で 20 件（前年 11 件）と 195%と伸びてきている。指定管理者を置くことで、相談しやすくなったようである。一方、利用団体数は、27 団体から 60 団体に増えており、じつに 222%となっている。

「まちのにぎわいを「民（みんな）」のチカラで紡ぐという狙い通りに、いまのところ推移している。

公園管理については、さまざまなドラマがあり、これまでの常識を覆すような挑戦をしてきている。

例えば、区域西部にある代々木公園は、閑散とした公園であったが、自主事業として「花火」のイベントを開催し、にぎわいを掘り起こしている。

一方、繁華街の中にある青空公園では、フードトラックの設置ができるよう、ルールの見直しを図るなど、イベントに合わせて、言い換えると市民に寄り添うようなカタチで、にぎわいづくりに取り組むことができている。

まだ、年度途中で、1 年を通した結果が得られたわけではないが、「ツナガルコンソーシアム」が関わることで、相談件数も増え、イベントの増加に繋がっている。

1 年間の活動の成果に、期待が高まっている。



講演時の様子

2. 意見交換「民(みん)」のチカラとは何か？取り組みの成果と今後の課題

以下の事柄が意見交換でできたので、総括する。

(1) PFI と PPP の違いは何か？

官民連携事業としての PPP は、周南市のような人口規模 10 万人台の地方都市では、うまくあてはまったのではないかと思う。大きな起債事業のうてる政令市や、体力のある自治体では、PFI の導入の方が向く理ではないか。

PPP は仕立てる段階で行政側が綿密に、周到に準備する必要があるように感じられた。また、参加してくれる事業者があるか不安なところだが、サウンディングすることにより、事業者側に情報を提供し、官民が共に取り組めるように思う。

(2) 5 年前に事業を見通せていたか？

周南市の行政担当者に、5 年前理時点で、このような事業を見通せていたかをたずねる意見があった。当初は、このようなカタチへの展開が予想できていたわけではないが、課題を見出す調査を開始し、結果をもって国土交通省に指導を受けるうちに道筋がついていったとの回答があった。

(3) 事業者が利益を得られる組み立ては？

異なる 3 者の事業者による取り組みであるが、事業者側の利益をどのように確保するかについて質問があった。駐車場事業は、プロポーザル発注時の事業費で設定しているため、利用者数が拡大すれば、事業者の利益につながるようにしてある。にぎわいの創出で人出が増え、駐車場利用が拡大することで事業者の利益にフィードバックされる仕組みとなっている。5 年間の事業が終了したところで、見直していく予定である。

(4) 事業を発展させるための改善点は？

このビジネスモデルを応用することではないかと考える。適用するフィールドを変えることや、エリアを変えてみるのが課題である。ただし、この事業は始まったばかりである。

主催者である徳山高専・目山から、次年度は 5 月か 6 月の早い段階で、「徳山駅周辺でのエリアマネジメント 5」として、事業者からの報告と、意見交換の時を持ちたい、また、市街地再開発事業の進捗も含め、まちの中のにぎわい創出の展開状況について関係者から話をうかがう機会を持ちたいとの説明があった。

(文責：目山直樹)



周南市役所



徳山駅前図書館

■GIS Day in 中国 2023■

日時：2023 年 12 月 7 日(木) 10:00~17:00

場所：広島大学・東広島キャンパス

主催：「GIS Day in 中国 2023」実行委員会
(広島大学都市・建築計画学研究室内)

後援：日本都市計画学会中国四国支部、
日本建築学会中国支部、日本地理学会、
熊野町、東広島市 他

協賛：ESRI ジャパン(株)、(株)エネコム、
(株)ジェクト、中電技術コンサルタント(株)、
(株)ニュージャパンナレッジ、(株)パスコ、
復建調査設計(株)

参加者：82 名

「GIS Day」とは、GIS の理解と利用促進、地域の GIS コミュニティの創出・拡大を目的として、米国で開始された世界的な草の根運動であり、現在、世界中で開催されている。中国地方では、2013 年より広島大学で「GIS Day in 中国」を開催しており、今回で 11 回目を迎えた(日本都市計画学会中国四国支部が後援)。

■はじめに

「GIS Day in 中国 2023」は第 1 部 (GIS 体験講習) と第 2 部 (講演会) に分かれており、第 1 部は広島大学東広島キャンパス内の端末室、第 2 部はキャンパス内のミライクリエ・多目的ホールにて開催された。

■第 1 部：GIS 体験講習会 (10:00~12:30)

第 1 部は、端末室にて、受講者 1 人が 1 台の PC をそれぞれ使用する形で、GIS 体験講習会を行った。講習では、協賛企業である ESRI ジャパン株式会社のご厚意により、ArcGIS Pro のライセンスを貸与いただいた。

■第 2 部：講演会 (13:30~17:00)

第 2 部に先立ち、主催者を代表して、「GIS Day in 中国 2023」実行委員会委員長の田中貴宏 (広島大学) より挨拶があり、その後、講演等が行われた。

講演：『「データに基づくまちづくり」での GIS 活用』

渡邊 一成 (福山市立大学 都市経営学部)

現在「都市計画からまちづくりへ」という変化進んでおり、そのような時代における GIS 活用の意義について、多くの事例 (教育研究、地域貢献) を交えながら、説明をしていただいた。特に GIS は、①情報の整理・統合、②情報の可視化、③情報の検索・分析、④情報の効率的な伝達・共有、⑤合理的な意思決定支援が可能であり、これらの点で、まちづくりで活用する意義があるとの話があった。

事例紹介①：「DX 活用による給水管凍結破損時のお客サービス改善事例ー『完全ペーパーレス』ArcGIS で現場へ Goー」山下勝久 (宇部市)、徳茂慎二 (宇部市)

まず、宇部市水道局で進められている DX (ICT・IoT 活用プロジェクト) について説明をしていただき、その後、その中の GIS 活用について説明をしていただいた。また、GIS データの活用事例として、Lバンド SAR(衛

星画像データ)による水道管の漏水検知システムの開発、GIS を活用した凍結対応受付簿などの紹介があった。

事例紹介②：「森林区域におけるリモートセンシングを活用した境界検討の事例について」鍛冶倉佳祐 (株式会社パスコ中四国事業部技術センター)

まず、森林区域において境界を検討することの必要性について説明があった後、リモートセンシング手法を用いた境界図作成のプロセスの説明をしていただいた。本手法の利点として、短期間で境界調査が可能で、地籍整備地区の早期拡充 (権利保全) に貢献できる点、山に入るのが難しい所有者の方にも確認いただける点などが挙げられた。

学生報告①：「内水氾濫危険地域における市街化動向と浸水への影響に関する研究ー広島県三次市畠敷・願万寺地区を対象としてー」木下颯 (福山市立大学)

平成 30 年 7 月豪雨の際に、内水氾濫被害があった三次市畠敷・願万寺地区を対象に、将来の市街化を予測し、将来的な内水氾濫による浸水被害を予測するという研究について、紹介がなされた。将来的に、農地の市街化による浸水リスクの増大が懸念される点などが説明された。

学生報告②：「洪水抑制効果に着目した市街地内のグリーンインフラ導入計画シナリオ評価」荒木良太 (広島大学)

広島県呉市中央地区を対象に、水害対策の観点から見た、グリーンインフラの効果的な配置と量を、数値シミュレーションにより明らかにした研究について、紹介がなされた。斜面市街地に 3 割程度のグリーンインフラを導入することができれば、ほぼ被害がなくなることなどが示された。

■おわりに (雑感)

今回は、企業展示、ポスター発表、懇親会を復活させ、ようやくコロナ前の「GIS Day in 中国」の形に戻すことができた。参加者の皆さんの感想を伺う中で、このような交流の場の重要性を改めて感じた。様々な社会課題の解決に向け、地域の GIS コミュニティの和を広げるという役割を担う、この「GIS Day in 中国」を今後も続けていきたい。(文責：田中貴宏)



企業展示・ポスター発表の会場の様子

■今後の活動計画■

■見学会・都市計画シンポジウム

「仁保の『小さな拠点』と地域づくり」

(2023 年度支部地域活動助成事業)

日時：2024 年 3 月 24 日 (日) 13:00 ～

会場：山口県山口市仁保地域

見学会：道の駅「仁保の郷」および周辺エリア

シンポジウム：仁保地域交流センター・

仁保ホール

スケジュール (予定)：

【第一部】 見学会

13:00～13:30 道の駅「仁保の郷」見学

13:30～13:50 周辺エリア自由見学

【第二部】 シンポジウム

話題提供①

「誰も真似できない誰でもできる村づくり」

元仁保自治会事務局 長岡秀夫氏

話題提供②

「地域に賑わいと元気を。道の駅の取り組み」

話題提供③

「未定」

話題提供④

「居場所づくりで進める人の拠点づくり」

仁保の里山茶屋 末永光正氏

※詳細は、支部 HP をご覧ください。

■2024 年度 (第 22 回) 支部研究発表会・通常総会

日時：2024 年 4 月 6 日 (土) 10:00～18:00 (予定)

会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ

北棟 6 階 マルチメディアスタジオ

(〒730-0036 広島市中区袋町 6-36)

(事務局：田中貴宏)

■編集後記■

この度初めてニュースレターの編集を担当させていただきました、荒谷建設コンサルタントの田辺博樹と申します。昨年度からニュースレター編集委員の体制が大きく変わり、諸先輩の方々が築いてきたものを引き継ぐ形でメンバーに加えさせて頂きました。皆様どうぞよろしくお願い致します。

少し自己紹介させて頂きますと、私は福井県生まれ福井県育ちで、大学入学を機に広島県民となり、以来 30 年近くが経ちました。広島のまちが好き、広島の人が好き、広島の文化が好きで、広島に住む前は人の巨人ファンだったのがいつしか熱狂的カーブファンに変わるほど、広島のまちを愛し、誇りに思っています。特に宮島が大好きで、年に 3～4 回は訪問し、行くたびに新たな魅力を発見しています。

さて、そんな我がまち広島を中心部では今、大型事業や再開発の動きが活性化し、まちづくりの大きな転換期を迎えています。旧市民球場跡地「ひろしまゲートパーク」の開業(2023 年 3 月)、サッカースタジアム「エディオンピースウイング広島」の開業(2024 年 2 月)、JR 広島駅ビル事業(2025 年春開業予定)、基町駐車場一帯の再開発事業(2027 年度完成予定)など、諸先輩方が長年に渡り検討してきた事業が次々と花を咲かせようとしています(西区在住の私としては、生まれ変わった西広島駅に感動！今後の更なる周辺開発に期待してます！)。新たな賑わいや交流が生まれることにより、まちの魅力が高まっていくことに、都市計画技術者としても、一市民としても期待が膨らみます。

一方でつい最近、ショッキングなニュースが飛び込んできました。「広島県の転出超過が 3 年連続で全国ワースト 1」。まさか、我がまち広島がワースト 1 とは。しかも 3 年連続。なぜ。ネット記事によれば、若者の転出が多いとか。このような結果を見ると、改めてニーズ分析の重要性を感じます。そうでなくとも、世界では不確実性や曖昧さが増して「VUCA」時代と呼ばれており、これまでの常識が通用しない今の時代。我々都市計画技術者も常にアンテナを張り、時代の潮流に合わせることをこれまで以上に意識していかなければいけません。

次号の配信は令和 6 年 5 月の予定です。ホットコーナーやコラム、トピックス関係など、学会員の皆様からの原稿をお待ちしております。

何かございましたら、中国四国支部事務局(総務委員長)田中貴宏(e-mail:cpj.chugokushikoku@gmail.com)までご連絡いただければ幸いです。(文責：田辺博樹)

編集委員：吉原俊朗(編集長)、織田恭平、北本拓也、白石レイ、田中健太、田辺博樹、福馬晶子、松田智仁、山下和也

※当編集委員は、総務委員会の要請により参加したメンバーです。ご参加いただける方は、編集長にお申し出下さい。